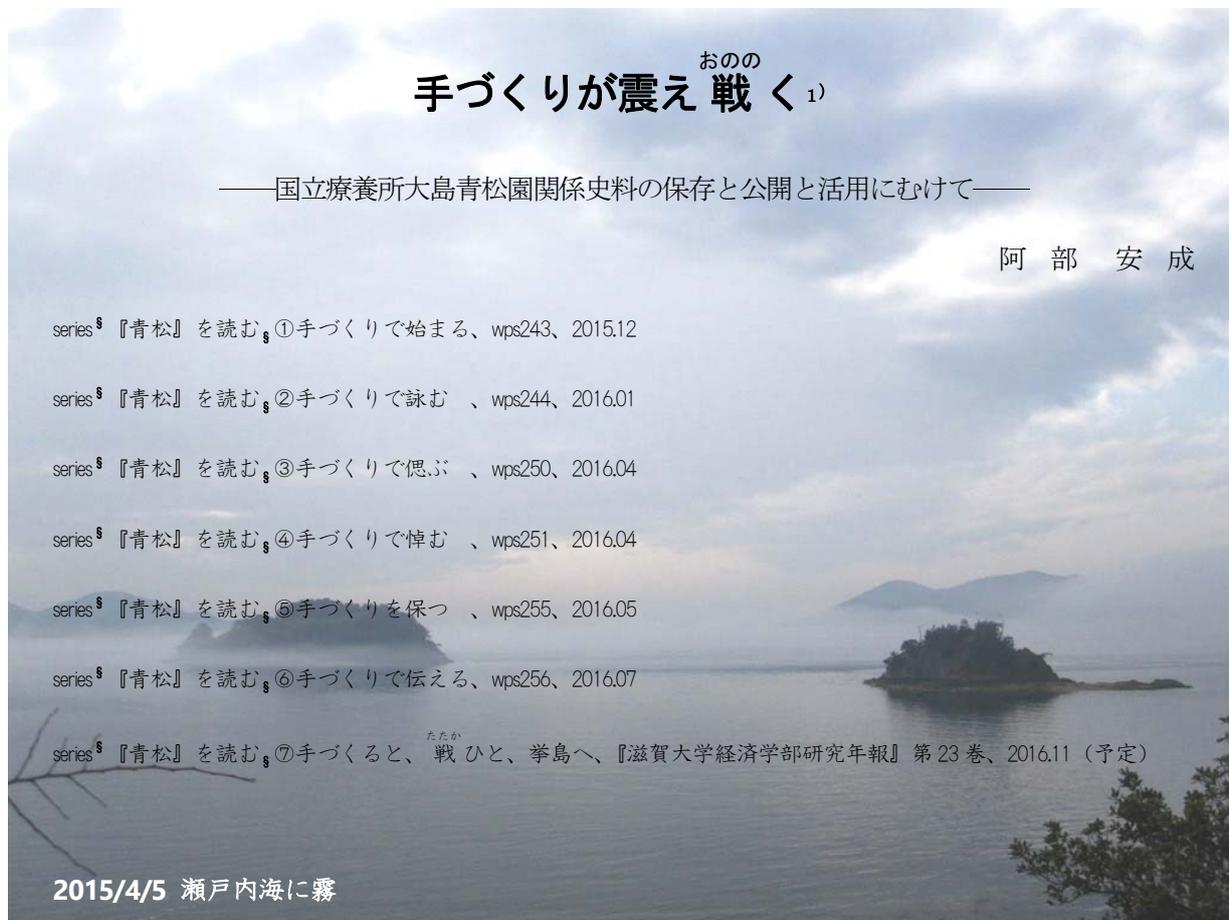


シリーズ<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>⑧



**第11号** ボール紙の表紙に貼られた紙片に横4段の文字列、うえから順に、誌名「青松」、つぎに号数「第十巻号」、そして特集名「高松戦災特輯号」、さいごに「昭和二十年八月上旬発行」、どれも左から右への横書き。前号の末尾で報告があった空襲のようすが、本号で特集として組まれた。

<sup>おもて</sup>表 表紙の文字と書体とその配列が整然としていて、まるで墓標のようにみえてしまう。

**目次** 掲載稿は、「巻頭言」、小見山和夫記「<sup>イカヅチ</sup>雷の丘（万葉研究）」、林文雄博士「米鬼の遺物（補助タンク説明）」、「蛆療法」、土谷勉「武士の嗜み」、小見山和夫「七月四日」、松田美津夫「一塊の炭（詩）」、笠居・小見山・泉・斉木・田根・浅野「短歌欄」、岩崎・喜田・香山・大原・太田井「俳句欄」、喜田正秋「自句自解」、笠居誠一「感想二つ」、松田美津夫「解決者（感想）」、斉木操「読者から得た戦局への思考」、「縷紅草（監視哨随筆）」、浅野繁「あとがき」、そしてさいごにそこだけか

1) 本稿は2016年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2016年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を<sup>ま</sup>交ぜる」の成果の1つである。

すれた字で、「挿画 中井・中島」と、「目次」にはある。

**巻頭言** 署名のない「巻頭言」は、土谷のペンだろう——

戦訓を活かすとは、評される範囲に於て、その真相を語るを先決条件とする。吾らは幸ひ園長先生始め職員の方から先夜親しくラジオを通じ、戦災高松の体験を承る機会を得、大いに資する処があつた。／「常在戦場」とは「常在空襲」を意味してよい。働くこと、寝ること、食べること、即ち吾らの生活の一切を、いつ如何なる空襲にも耐へ得る態勢におくことこそ、刻下、最も緊急を要する重大問題ではあるまいか

——その裏面にある謄写版刷りの文書は、前第 10 号で「あとがき」の裏面にあつた、1933 年 11 月 27 日付で常務委員会と特別委員会が発信した文書におなじ。ただし、ここでは「第四十三号室」と手書きで記された、おそらく配布先が、前号のそれとは異なる。

**雷の丘** 小見山和夫が記した稿は、「目次」では「万葉研究」とあるが、『日本書紀』『万葉集』の双方をふまえて、「奈良県高市郡飛鳥村大字雷」にある丘についての文章である。おそらく日記帖とおもわれるものの一部の切り抜きが貼つてある。写真と文字があり、「雄略天皇の勅命により小子部のすがるこの丘に雷をとらへしといふ」(活版印刷)とのキャプションによって示されている写真がその丘を写しているのだろう。

「雷」とはこれまでもしばしば誌上で表現された「醜翼」すなわち米軍の謂で、それをとらえるということか。

その裏もまた切り抜きで、「呂紀／鳳凰図／(知恩院蔵)」との活版印刷による文字がみえる。

**TANK** 「目次」にいう「米鬼の遺物(補助タンク説明)」が、本文「<sup>タンク</sup>TANK二つ」である。その 1 ページめ上部には、大島の西海岸で、北山を背景にそのタンク 2 つがころがっている写真があり、下部に記事——

二十二日午後敵機は大島上空からこの写真にある二つの補助タンクを落した。試験室南の防空壕から見てみた人が何か落したゾ落したゾと叫び、皆耳をすましたが爆発音は聞えなかった。解除になって出て行くと栈橋の近くにタンクを落したと云ふので早速園長と云つてみる。／上のタンクの棒は撮影の際添へた一米の尺で全長二米二〇と云ふ。／下のタンクにはまだガソリンが二升

許入って来て皆でバケツにあけた。／それ飲めぬかなーとアルコールずきの漁士が嘆声を発して笑はれた。／一つに二石五斗許入ってゐるのだ。

このペンはおそらく医師の林文雄。彼はこのタンクに強い関心があったのか、詳細に記録をとっている。写真貼付のつぎのページには、タンク自体に記載されている注意書きを英文のままとその訳文と両方を記し、そのしたに――

上の注意書は両方のタンクに書いてある。(下のも) 専門外なのでよく解らぬがタンクの上について居る弁の説明である。長期に使ふ時と短距離で連絡飛行の様に何回も使ふときとに分けてあるらしい。中に専門の方が居られたら学術語 (Pressure vent line の如き) を教へて貰ひたい。／下のは容器の方の説明で／米一ガロンは二升五合／英一ガロンは二升五合二勺

もう1枚に――

上記の表は下の容器にだけ書いてあった、ジェチソンと云ふ言葉は難船の時荷を軽くする為投棄するものであると云ふ。飛行機では使ったら投げる容器とならふ。／芸国ストーブ会社とあるが色々な会社が戦時工業に動員されて居るのであらふ。芳香燃料とはガソリン類のこと。マークはサンタクロースかもしれぬ。タンクの尖に→NOSTEP とあるが足をかけるな乗るな程の意。／爆発物だからならん。／容器が柔いからもあらん。

「高松戦災特輯号」と表表紙にあったので緊迫感濃厚な誌面となるかとおもったが、いくらか微笑ましい記事とも、余裕がある筆致ともいえよう。

医師ゆえにか、「主として病理学的見地より観たる癩の病型問題に就て／(昭和十年十月第三十回日本皮膚科学会、岡山地方会)」と謄写版で刷られた紙の裏面にタンク観察記録が記されていた。

**蛆療法** タンク記録の最終ページは見開き1枚の右ページ、その左ページが「<sup>ウチ</sup>蛆療法」と題された稿。末尾に「青山荘主人」の署名。左右どちらのページも林のペンだ。

「戦災高松の救護所で大抵の患者の傷に蛆が生いた」と始まる記事は、過去のあちこちの事例を参照しながら、「蛆」と「小便」の効能を説く。末尾の、「資材不足の折でも蛆の培養は困るが小便ハ生きて居る限り無限に出るのだから治療薬としては最も経済的であり常に新鮮であるから衛生的でもある。／誰か裏傷にでも沁みる人なきや!?!」とは、いくらか呑気か。

この見開きに使った紙の裏面にも、さきとおなじ日本皮膚科学会の文辞がある。

**こころの疼き** 土谷勉の稿「武士の嗜み」は、「十行二十字詰」の文字と罫目が印刷された4百字詰め原稿7枚に記されている。土谷がその夜にみた光景――

慄然と下弦の月にぼんやり照し出される高松の方角を睨んで立つた。老松の梢越しに天は既に炎をふくみ、雲や煙か、爆煙の渦を巻いて奔騰するのが見受けられ、炸ぜる音はひつきりなしに、三里距てたこゝの大地をさへ震撼した。泥中に浮く鮒のやうに、爆煙を縫って旋廻する敵機が望見され、邀撃する高射機関銃が火を吐いて咆哮しつゞけた。／何と恐いことよ。「まさか」を恃んで油断する心の――。高松は今日目前に於て、敵の利刃に腸まで抉られてゐるのだ。私は悲憤の眦を決し、貪婪あくなき劫火を見詰めて男泣きに泣いた。／夜目にもくつきり水平線を描いて、火は海岸沿ひに東へ東へ廻る。風が西らしい。私は幼い時、地獄絵図を見て泣いた記憶を思ひ出した。しかし、そんな物は比較でなかつた。焦るやうな憤りが全身を駆廻る。自分らはこんなにしてゐてよいのか。全力を挙げて邀撃しなければならぬ。手段が私にもありさうだ。どうせう。しかし、どの一つも私には思ひ出せなかつた。

対岸の光景が、みるものを戦かせ、焦らせているようすが記録されている。では、なぜ「武士の嗜み」なのか。

防空壕へ避難するところで、「誰かの小説」に、空襲のさなかに「壕から出て立つて小便する部隊長」が描写され、「そんなのは真の勇者と言へぬ」という一節があつたことをおもいだし、ついで、「由来、昔の武士の平素の嗜みなど言ふものは」と話の筋が移る。

あらゆる時と場合、即ち常住坐臥に於て、不測の変に備へ、吾身を護り抜き得る姿勢におくことであつて、目の配りなど言ふことは、その自らなる結果の一つに過ぎない。「常在戦場」といふ言葉の如きも、武士の嗜みから言へば言挙げする程もないであらう。武器の進歩に対応し、この武士の嗜みに変化のあるのは理の当然で、[中略] 先づ敵機に対し己の退避すべき壕の位置を目測して後、持場を死守することは近代化された武士の、否、頻襲下に於ては戦ふ皇国民全ての心掛くべき大事な嗜みの一つではあるまいか。

と、空襲がしばしばあるこの戦時下の「戦ふ皇国民全ての心掛くべき大事な嗜み」が説かれた。そ

のうで、

病むとはいへ、生命を軽んじてはならない。恐多いことではあるが、生命の一つ一つは上御一人に帰一し奉るのであつて、退避すべき時退避せずして若し敵弾に殞れるやうなことがあつたら、それこそ面目ないことである。まして己のはしたない行動一つが敵機を誘導し、怪我人を大勢出すやうなことがあつたら殺人罪以上であつて、何ともお詫びの仕様がなではないか。

戦死、殉死、殉国が奨励される戦時下にあつて、いのちを軽んじるな、とは一見、時局に反した言辭のようだ。だが土谷にそうした意図はない——「生命の一つ一つは上御一人に帰一し奉るのであつて、退避すべき時退避せずして若し敵弾に殞れるやうなことがあつたら、それこそ面目ないことである」からなのだ。

では、土谷の目に映る現状は——

にもかゝらず、視よ！身边を——。そこには何と敵弾雨飛の下、立小便する流の似非勇士の多きことよ。私は人に説かうとは思はない。いまに生きる武士の嗜みを四日の払暁高松の爆撃によつて眼前に教へられ、平手で横面を撲られたやうな心の疼きを感じたことである。

とみせ、彼の稿は閉じられた。「視よ！身边を」とは、療養所内か、それともその外の社会をいうのか、彼は高松の爆撃になにをみて、なにを教わり、どういう「疼き」を感じ、それをかかえながらこののちの数か月をどのように生きようというのか。

土谷稿の最終ページの裏に、「十行廿字詰」「西香 49」「規格 A4」の文字と罫目が印刷された原稿用紙が貼ってあり、そこに「七月下旬各室収入表」の題目が記されている。波線で囲まれたところには、「◎これが八月一日詰所からお渡しした各室収入表であります。／作業奨励金はもちろん、お百姓さんの収入もふくまれてあります。／大工さんやかじやさんの収入もふくまれてあります」と注記がある。合計金額は、726円。

**こころがまえ** 小見山和夫の稿「七月四日」という題目は、高松空襲の日付である。

高松市が憎むべき敵機の業火に焼かれた去る四日のその翌日、その第一報とも言ふべき声を高橋先生が園内ラジオで放送された時、何よりも大きな感激をあたへられたのは園長先生がああ烈しい敵の空襲の下で御家族ともどもお身を持つて避けられた折、「青松」を、吾々のあの「青松」だ

けをお持ちになった、といふ事であつた。昨年吾々がこの聖戦に捧げ得べき最大のものとして「藻汐草」を捧げた時、今後の吾々の文芸のために園長先生が大変に御心配下さつたものだが、幸ひ「青松」が全く新しい姿を持って生れ、創刊号以来園長先生はじめ諸先生方が如何に温いお心をよせられてゐるかは今更言ふまでもないことだが、然し、かくまでには申訳ないことながら私は思つてゐなかつたのである。たとば貧しい歌の一つにまでも目を通して下さる人々があらうとは思はなかつたのである。それが「園長先生ばかりでなく高橋先生も、林先生も其他の方々が如何に「青松」に誠実な関心を持つて下つてゐるかを知つて胸があつくなつた。続いて林先生からも、また園長先生御自身からも親しくその事をお伺ひした時感激の涙にふるへたのは吾々同人達だけでなく島全部の人が、中には今まで「青松」の存在すら知らなかつた人々までも同様であつたと思ふのである。敵弾と業火の中にも終始園長先生のお生命と共にあつた「青松」！何といふおごそかな幸に恵まれた「青松」であることか。それにしても、園長先生がお命にかけて護つて下つただけの価値が果して「青松」にあるであらうか？と私は反省するのである。いや作品のよしあしではなく、これもまた、ペンを執る者の誠実の問題であらう。吾々は、かりそめにも怠惰な心であつては申訳ない。銃を執ると同様の厳たる心構へを持つて道に励むべきであらう。しかして園長先生始め皆様のお心にも応へなければと思ふのである。

前号末尾にも記されていた、『青松』をめぐる園長のあの逸話である。前号には、「「青松」だけ」と記してあつたか。これは戦時の高揚を報せる重要な記録だとおもう。

小見山の稿には、末尾に1行空けて数字分あたまをさげた記述がある。

四日の空襲に就いて何か書く様にとのことであつたが、ここ数日来転室其の他でかなりごたごたし、今移つて来たばかりの室で、切に追はれてやつと之だけ書いた。自分の家らしく落ち着いたら勉強したいと思つてゐる。二十五日警報発令の中で。

大島なりの慌ただしさのなか、高松空襲から3週間後の執筆だった。

**その裏面** 小見山の稿の裏は、これまた規程類の謄写版刷りだった。ページノブルは、5、6、9、10（原文の漢字カナ表記を漢字かなとした）。

会務処理規定／第一条 本会の会務を処理するために左の七部を置く／一 庶務部／一 会計部

／一 人事部／一 作業部／一 殖産部／一 購買部／一 病室部／第二条 各部の分担事項は之を左の如く定む／庶務部／一 祭祀及儀式に関する事項／一 記録及通信に関する事項〔ここまで5〕

一 会則の制定改廃保管に関する事項／一 各種団体に関する事項／一 会議及集会に関する事項／一 役員の分限並選出に関する事項／一 慰安娯楽及ラジオに関する事項／一 手当謝礼及功労金に関する事項／一 教化文芸に関する事項／一 印刷物及脚本検閲に関する事項／一 其他各部に属せざる事項／会計部／一 金銭出納に関する事項／一 予算及決算に関する事項／一 本会の財産保管に関する事項〔ここまで6〕

一 普通食糧に関する事項／一 其他収益事業に関する事項／購買部／一 購入販売に関する事項／一 加工販売に関する事項／一 統制販売に関する事項／一 個人販売取締に関する事項／病室部／一 病室に関する事項／一 病室炊事に関する事項／一 治療室に関する事項／第三条 各部に主任一名、副主任若干名を置き、常務員を以て之に補す／第四条 各部主任及副主任の分担は総代之を命するものとす〔ここまで9〕

各部主任は総代の旨を享け会務処理の責に任するものとす／各部副主任は主任を輔佐しその指揮の下に事務を分担するものとす／第五条 副総代、主任事故により執務し能はざるとき、又は欠員を生したる場合は総代の指名により副総代又は他の主任之を兼摂するものとす／第六条 各部事務の聯絡統一を計るため総代統裁の下に主任会議を開くものとす／第七条 各部主任は所管事務に関し副総代を経て総代に報告しその指揮を享くるものとす／第八条 作業主任を輔佐し専ら作業の監督指揮をなさしむるために作業監督若干名を置くことを得／但、作業監督は常務員を以て之を輔するものとす／第九条 総代は必要と認むる場合囑託を置くことを得／第十条 総代副総代主任及名誉役員にありては二ヶ月、其他の役員にありては一ヶ月以上入院し、又は其他の事故により執務し能はざるときは自然退職と見做すこと〔ここまで10〕

内容からして一連の4ページ分ながら、ノンブル7と8が欠落している。この欠けたページがおそらく、前号第10号に掲載された泉俊夫、綾井譲、笠居誠一、小見山和夫による稿「短歌」の裏面(7と8のノンブルあり)なのだろう。2号にわたって、反故となった一連の文書の裏面が再利用

されていた。この全10条で完結する規程とみてよいか。

**声** 「No.23 10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙2枚に、松田美津夫「詩／“一塊の炭”」。

波打ちぎわ／そゞさまよひ行く／足につまずきしものあり／とく視れば／一塊の石炭の朝陽に映  
 ゆ——／こは今頃にめずらしく／拾ひあぐれば／その重さかげんのちとかるし……／しはしほど  
 ／そのなになるか／知るをえざれど／ふと胸ぬちをかすめさる／いまだ余憤のおさまらぬ／四日  
 の朝の惨事／見すかせば高松の様／なんの異様を見わけえざるも……／とぼしき生活中より／た  
 くわえられし米麦のいづれ／大火ののなかに焼去し／その名残りとゞめ語らふ／此の一塊の炭か  
 けら／はるばる三里波間を漂ひ／吾が島の岸べに／たどりつきしを……／我 ひしと抱きぬ／抱  
 きし手の中にありて／かぼそくも切なる思ひこもる／炭かけらの声きゝぬ／そは音波なきなれど  
 ／＝本土に米敵をむかへうつなれば／只だ一人だに生かしおこなかれ＝と／骨うち 血流と  
 るまるほどに／きびしき声 しかとききぬ。七月二十七日

大島に流れ着いた「一塊の炭」に「きびしき声」をきく島の在園者。

**睨む** 笠居誠一「短歌」は、謄写版刷り原稿用紙の両面を歌で埋めた。

高射砲の裂烈音は遠雷の轟く如し間をおきてひゞく／雲多き朝空仰ぐ目に憎き敵の梯団類目標飛  
 ぶ／屍を故山にうつむみ戦と猛雄の決意いや新たなり／空襲警報鳴る梅雨空の雲低う敵の梯団幾  
 目標飛ぶ／空を焼く炎むらの中に赤く見ゆ敵機のおごり睨む悔しさ／頭の上に降る火の雨を美し  
 と死生の際に有りて見にけり 「池田婦長」／腸に沁みる悔しさ堪難ふ投弾音の地響きは聞く／  
 余燼未だみ空を<sup>こが</sup>焦す朝明けを憎翼一機低う飛びけり／灰燼の中雄々しも<sup>た</sup>起ちあがる讃岐健児に  
 頼むもりあり

醜翼を恐るにあらず死ぬるべき秋に<sup>とき</sup>死なむと身を退避する 七月二十四日／醜翼のおごるをじ  
 つと睨みつゝ為す術なさの悔しさに居り／視野広う焼野となりし一角に立つ鉄骨の家はかなしき  
 ／現身は木蔭にかくし憎翼のおごるを睨む仇は撃むと／防空服装に病む身つゝみて女らも持場に  
 死すと決意語れる／ほつとして仰ぐ夕空美しく何事も無き色に暮れけり 警報解除／ほつとして  
 井の辺に汗をぬぐひつゝ夕茜射す空を仰げり／とりたての茄子の<sup>いろ</sup>艶に<sup>も</sup>保つ味覚朝はうまらに餉  
 を食しにけり

笠居の稿は、その表裏どちらにも、縦書きに歌をならべたそのうえに、横一線の赤が引かれている。  
引き札天紅でもなかろうが。

**歯噛み** 小見山和夫「短歌／空襲三題」——

一、梅雨空を襲ふ敵／敵編隊の高さを示す指先に我が眼捉へしは鳶のかげとも／梅雨雲の低きを  
襲ふ敵のかげ十機ぞといふに我が眼見分かず／病む眼しきり凝らすに梅雨雲の垂れ暗くして敵機  
見分かず／友軍機いどむと見しは瞬時にて我が眼には暗し梅雨雲の涯／二、火を噴く敵機／ひた  
叫ぶラジオに聴けば敵機の位置をつぶさに捉へあかとき三時／火を噴きて海に逆墜つ醜翼の気味  
よき姿ラジオ叫びつ／火を噴きて墜ちゆく見れば神怒りのはたいさぎよし敵ことごとく／敵すぎ  
しま空澄みつつ常のごと我ら朝餉の箸をいただく／癩とふ世に生くまじき命なほみ戦勝たむ日の  
ために＝〔「寿」にみえるがルビが「つ」にみえる〕む／三、七月四日／海をへだてて燃ゆる業火  
を打見つつ我が憤り歯がみして堪ふ／殺戮のかぎりを敢へて冒す敵にわが神怒り必ず遂げむ／焼  
夷弾<sup>ひろ</sup>数広りつつ遠空にきらめく見れば花火のごとし／天を焦す業火の下に歯ざしりて堪へみむ  
怒りまざと眼に思ふ／燃へたける炎の空をよぎるとき敵機の姿まざと明るし／防護員退避をふれ  
てかけ去りし山手の闇に不自由舎は建てり

このとき梅雨明けはいつだったか、その発表はあったのか。戦時下に梅雨明け発表はなかっただろ  
う。

小見山の稿は、「No」「10 20」「NOBLE A2」の文字と罫目が印刷してある原稿用紙が用いられ  
た。

**燃ゆ** 泉俊夫「青松号詠草」——

投薬を待つ窓の玻璃に映ろひて来り去りゆく雲の親しさ／療舎毎に退避準備を告げてゆくこゑ遠  
ぞきぬ月夜明りに／七月四日／七月の四日の朝の暁天を染めしほむらは一生忘れじ／必勝の決意  
に燃えて焼土にぞ起つ御民らぞ夢ひるむなく／必ずや勝つ御戦と念じつつ日毎いや増す敵機に備  
ふ

泉の稿は、「OS 原稿用紙」「10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙使用。

**轟く** 斉木操「短歌」凄絶——

国土いま焼かるるなんぞむらむらとつきあがり来るいきどほりかも／これやこれ云はむすべなし  
 火の上に火を打ち濺ぐ敵機にくしも／焼夷弾きらめき〔赤インクで「きら」に抹消線を引いて「花  
 火めき」と追記〕咲くや〔同「咲くや」に抹消線、「爆ぜつ」追記〕間もあらず火焰地を這ふ野火  
 の如くに／猛爆の形相まさに打ち見つつ自づからなる祈り心よ／轟々と焰の音海にとどろきて凄  
 じき夜や底しづかなる／海をゆり地〔軸か〕 抽をゆりて落つる爆弾絶間なく続き心耳つかれぬ

さきにも示したとおり、この稿には赤インクでの追記があり、おそらくそれはのちの芥木自身によ  
 る手とおもわれる。「轟々と」の歌には、「の音海にとどろきて凄じき夜」まで赤インクによる抹消  
 線が引かれ、その右に、「〔軸か〕り伝わる敗戦図海向いに＝じつつ」と、もとのうたの左には、「轟々  
 と焰〔軸か〕＝り伝わり撃ち焼かるる海経て見る夜見のしづかなる」との追記がある。

あめ天を焦がし海に映ろひ焰ゆる火のただに轟き音たつるなり／燃えさかり燃えさかりくるをなほ  
 もなほ後たたず襲ふ敵機にくしも／ただならぬ騒ぎに覚めて蛙放あぞくきへども声かしましう共に怖がる  
 〔ほぼ全体に赤インクで抹消線が引かれ、「逃げ走る人の騒ぎに声殺しいたる蛙か時に呟く」と追  
 記〕／朝の陽のおだしく照らふ下もとにして燃え崩れゆく現実をあはれ（明る朝三首）／人の世の  
 さはぎを〔赤インクで「さはぎを」に抹消線、その右に「狂乱」と追記〕よそにいきものの小さ  
 き蟻〔「の小さき」に赤インクで抹消線〕はただ〔この右に「せつせと」と赤インクで追記〕這ひ  
 をり〔この左に「人の世の阿修羅よそこに陽の恵みただに浴びゆく蟻の衆列」〔「縦」と「群」に赤  
 インクの抹消線〕〕／陽を享けて燃え崩れゆく街の様現うつつに見つつ夢の如しも

芥木の用いた原稿用紙は、「十行 廿字詰」「西香 49 規格 A4」の文字と罫目の印刷がある。

**覚悟** 田根正雄「短歌」。ここにはまず、前書きがある——「日々度を増す敵機空襲下、覚悟の  
 ほどをしたゝめ写真と頭髪を我が形見と送つて戴きました。即ち母親の心情に感謝して」と、その  
 悲壮感が記されている。

筆蹟はあわれとたどる文にあり母の心情こころの身に沁みて哭く／何処にて果つる命も国の為私事は哭  
 くべからざめ／額なる我が頭髪をきり形見にと吾子三人に与へ給へり／黒髪の艶豊かなり母親は  
 未だ若かる面影ぞ見る／離りてぞ九年歳過ぐ今にして心情厚ければ幸福しあわせに泣く／いかばかり苦  
 労はあるらむ黒髪を涙ながらに戴きにけり／形見なる母の黒髪身につけて日々の生活にゆたかさ

はもて／深夜なる防空情報の故郷なれば母安かれと形見に祈る

田根の稿は、「10×20」の文字と罫目が印刷された原稿用紙使用。

**燹** 浅野繁「短歌作品」——

兵燹／兵燹の嘆きはむしろ炎<sup>ほ</sup>むらなす怒りをいかに耐へざらめやは／兵燹のあとあらはなる陽の  
照りに匂ひみしとぞ山梔子の花／焦土戦術さもあらばあれ焼跡の山梔子の花に感極りて／焦土と  
ぞ化したる<sup>ちまた</sup>巷の街路樹の黒き葉群に夕べ颯つ風／一碗の重湯になごむ父ありと聴きつつしはや  
臉あつし

綾野は、「日本標準規格 A4」の文字と罫目が印刷された原稿用紙を使用。

**蟬と風** 岩崎緑雲「蟬」は俳句——

退院のよろこびにあり蟬時雨／舟か出て港静かや蟬時雨／風鈴や宿るときめて落ちつきぬ／風鈴  
やねころびかたる気安さに／よんどころなき用事出来端居たつ／風鈴の部屋より海の見えにけり  
／風鈴に海よりの風ありにけり

ここに戦時は感じられない。

**花** 喜田正秋「俳句作品／「えごの花」」——

弾道に喰入る眼<sup>まみ</sup>や葉山吹／撃ちに撃つ高射砲座やえごの花／弾幕に喘ぐ敵機やえごの花／蛇行  
する敵の一機や花柑子／盲爆に沸る血潮やえごの花

——喜田の句は、反故にした紙の裏に記されていた。その裏=かつての表の一部がみえる。

唯物的な相互間（これは小生のみ我身边）の眼の動きなどさらけ出して語り度い欲求に駆られて  
なりません。／腹をうち割って話し度い、何時もこのやうな気持で手紙を書き初めるのですが中  
途で自己の思考力が続かないのと、このやうなことを果して書いていゝのだらうかといふ不安定  
な感情に支配せられてすぐやめて仕舞ふといった具合で今迄ついぞ書いたことがないやうな気も  
するし、又書いたやうな気もする、これも、こゝの生活にあきアキしてゐる為であらう………た  
だ表面を眺める者と内面を知り尽して仕舞つた者との悲劇は貴兄もあらゆる部面に於て体験せら  
れたことと思ふから今更書かないけれども此処の生活がいやになつたことだけはたしかである。

だれかに宛てた手紙の下書きか。療養所の生活に厭いた嘆息か。

女 香山爽子「俳句」——

晩涼の帆船ゆらゆら漕ぎにけり／浜涼し庵治岬の月高ければ／闇の唄聞き入りながら涼みけり／  
月見草寂しさの足とどまらせ／いも南瓜今年のものゝ甘さかな／倚りなれて病も久し夏至の窓／  
まひまひの輪を描きかね萍に／紫陽花に毛雨はさみし長病

女性の寄稿はめずらしい。

つぎの、大原枝風も女性か。

高松空襲の日／雲の峰へ劫火明りのはためける／壕口に敵機にらめる日焼顔／壕中に避難の団扇  
賑はしく／焼夷禍は夏の海へと拵りぬ／焼夷禍の人と隔てゝ夏の海／罹災地の敢闘祈る草茂み  
／夏草をむしりて眺む災火かな／蚊柱や命惜しめば壕に入る／夏草や彼我弾幕に浮き出づる／空  
襲や振舞水に生死賭け

女を詠む句もある——大田井春峰「俳句」。詠み手は男か、女か。

配給の桃を抱いて老退避／退避して蚤を取りみる女かな／退避して浴衣重ね着して居りぬ

**自句自解** 喜田正秋の「自句自解」は、「弾道に喰入る眼や葉山吹」をとりあげた。

七月四日未明、それはわれわれの終生忘れる事の出来得ない一刻であつた。空襲の惨禍、いな苛  
烈かつ凄烈なる現代戦を身をもつて経験したのだ。言ふべからざる戦慄と憤怒の裡に！／炎々天  
に沖す焰に覆はれた高松市街を海を隔てて見た時！投弾を了へて醜翼を焰にさらしつつ悠々上空  
を脱却する敵機を見た者は必ずや、憤怒と共に戦ひといふものの真の姿を把握し勝たずハ息まじ  
の覚悟を新にした事と確信してゐる。／この句ハ西の浜に於て遥か高松の戦火を眺めつ切齒扼腕、  
折から撃ち出すわが高射砲の弾道を引いて敵機に迫る弾丸に魂あれと祈りつつ喰入るが如くにそ  
の後を凝視してゐたのをその儘句としたのである。よくを云へば結句の「葉山吹」をなんとかし  
たいのであるが適当な季題が見附からないのでその儘にした。御批評が得らるれば幸である。

と、「終生忘れる事の出来得ない一刻」を言葉にしたというのだった。

**勝利へ** 笠居誠一「感想二つ」は、謄写版刷り原稿用紙4枚に記され、その上部には横に赤一線  
が引いてある。

「去る六月三十日の夕、総代詰所から庶務の三木さんが、日没後の焚火及び灯火管制についての

注意があった」ので、あらためて、「無自覚の内に「スパイ」、既に利敵行為をなす売国者」とならないよううったえ、「二つの事を互に実行して行きたと思ふ」と記した。それは――

その一、日沈後の焚火は屋外屋内を問はず中止する事、煙突の煙は夜空から見ると真赤に見えて良き目標になる／その二は外部が暗くなつてから電灯の光が外部に射して居るか否か、もし光が見える時には早く遮光をする事、この二つが実行出来るなら、庶務からの注意を受ける心配は無用である、この事は無毒地区の方々にも実行して頂きたいと思ふ、その次は御願ひである、近頃は毎夜の如くに警戒警報空襲警報であるが、空襲の時に限り消灯をして警戒警報の時には空襲管制で消灯をせない事になつて居るが、昨今では警戒警報が発令になり汽笛が鳴る頃には既に敵機は頭上を通過して居る位で警戒警報は空襲警報であると思ふてよい、それで少しの間位は暗くても良い、暗いには大分目もなれて来て居るから、警戒警報発令と同時に消灯をすれば、敵機に目標を与へる事もなく防空も完全であると思ふ

とのこと。

2行分あいだを空けて笠居の稿がつづく――

これは昨夜「十九日」詰所よりの放送を聞いて感激した一人として、謝恩生並に秦さんに御礼を申上ると共に病友の全部が、謝恩生や秦さんの様な美しい、犠牲奉仕になつたら、如何に美しい島になるであろうかと思ふ、既にそうした美しい心で機雷監視に防空壕掘りに日夜勤務されつゝある奉仕団員その他の方々には感謝の意を表したい、一億一心滅私奉公が出来て居るなれば現在の如き危機に至らずして大東亜戦争は勝利を得て居つたであろうと、総代も放送されたが、誠に然りと同感する者である、然し今からでもおそくはない、一億一心となり私に死て公に奉ずるならば、最後の勝利は必ず我にある、現在の戦局が如何に悪くても最後の勝利を信じて雄々しく勇敢に戦ひ抜く、是れ一つが戦争下我等の生きる道である、毎夜の空襲で大中小都市が次ぎつぎと焼野原となり、生産戦は半身不随の状体である故に疑心暗鬼を生むであろうが、鳳は灰燼より甦ると言ふ、我らも灰燼に立ち一層敵を憎み復讐心に燃え、最後の勝利を信じ心田に力を入れて雄々しく聖戦一本の道を進み行かん／山はさけ海はあせなん世なりとも君にふたころわれあらめやも「百人一首」／七月二十日記

1945年の7月も下旬にはいったところで記された感想である。

**時** <sup>とき</sup> 松田美津夫「感想／“解決者”」で執筆者は、「なにかにつけて此の様に大儀々々にやらかすものだから少しの注意さえ忘れがちになり思わぬはずみに頭などをこつんと打ちつける」との不具合と、それへの「たまらない腹立たしさ」を明かすところから稿を始めた。

不注意による失敗で、「其の時の痛さと言つたら＝三日に一度位いは床をかたずける折りやらかす＝室員など面白がつて笑つたりする時がある＝そう度々同情しておつたら私の如きになつてくると同情もばからしくなつてくるらしい＝それぞれとして笑われた本人の心持こそたまつたものでない時などは戸棚の中のフツの上によつ伏せたまゝでしばらくは動かずに居ることさえ再度だ。

こうしたところ持ちの松田は――

実は此うしてペンを握るさえ投げ出したいほどに大儀さをおぼえる、今まで思つて居た処なのだが此の稿を最後に、しかも絶望と趣〔原文はそうように頁〕を記すつもりだつたが、こうして書いて行くうちにやつぱりあきらめきれないものがこのこつて居るを見いだした次第、文字などカナであるふと誤字があるふととにかく書いて居る間が幸福なのかも知れない。処がそのうち書くこともできなくなるのかも知れない彼の様子に好んで読んだ神曲・失樂園なども今は長がすぎて読めず文字が小さすぎるとさえ感じてきた眼の調子、それなら歌でも歌えば良さそうなものだが是が又声を失なつた今日此頃では全く駄目、それに本来歌を歌ふなどの声の主でもなく、時たまに讚美歌などなる時があつたにはあつたが是れとて度はずれの歌曲を作するが良い処だつた自分、此の様考へてくると生きる楽しみなどなくなつたと時として思ふことのあるを三百の読者は如何に思われますか。どう思われたにした処で正直な話が生きることは馬鹿気て居るとさえ思われる時がある、しかし自分から進んで死を求めやうとは思わないが何時死んでも良い自分だとは思ふ――此の思ふことがまさかの時には死ねない自分を見いだすには至るだろうと信じて居るが早く其の時がと待たれて止まぬ次第／時＝時こそは万事の解決者だ／此の大東亜戦にしろ／私の馬鹿気たやりばない感情も／すべてが時の解決をして待たふ／今の私には／万事が時なくして／解決者を見いださぬから……／二月二十九日

と記した。末尾の日付からすると、これはかなり古い稿だったか。表題にいう「解決者」とは、彼にとって、「時」だったのか。

**読書** 齊木操の稿「読書から得た戦局への思考」は、帳面のページを破いたようすの紙に細かな字でびっしりと記されている。No.1 から No.8 までの中編である。

私は最近読んだものの中で、時局に關聯して感銘深く見たものが四つ程あつた。／此の四つは作品的にもそれぞれ優れたものであつたが、その内なる精神の何れもが高く滔々と音立てて響き来る所に、私は今日の戦局への關聯性を見出した訳である。

と述べたうえで齊木は、4冊の図書を取りあげた——「後に続くを信ず 藤田清雄著」「草のなか 岩倉政治著」「宮本武蔵・武蔵隨筆集 吉川英治著」「神の所在 武者小路実篤著」。NDL OPAC で書誌情報をおぎなうと、藤田清雄『後に続くを信ず』（文松堂書店、1944年、268p）、岩倉政治『草のなか』（講談社、1944年、225p）は「日本小説新書」の1冊、このころ吉川英治は、『宮本武蔵』普及版（大日本雄弁会講談社、1940年）の第4巻から第8巻までを刊行し、また『隨筆宮本武蔵』（朝日新聞社、1939年）も上梓したという情報あり（後者についてはNDL OPAC で未確認）、武者小路の著作についてはその表題での単著は確認できなかった。

まず、『後に続くを信ず』は、「今次大東亞戦争に出陣して“箇人感状”二回と云ふ抜群の勲功を遺してガダルカナル島に散華した若林中隊長の殉忠録として、その偉大なる奮戦の状況を論し、その崇く浄き人となりを讃仰したものであつた」。齊木は同書に「真日本精神の発露であり、大和魂の権化たるもののふの美の象徴」を読みとった。そして——

この高さと尊さは常人の仲々に及び難き処であるが、それは兎も角として、我々日本人の血の中には斯く迄も高く尊く美しきものの秘そみあることを思ふ時、誰しも大いなる脅威と感激を覚え、併して新たなる勇猛心の躍動を感じるのであつた。／其所がこの書の真価であり、不滅の光彩に輝くものであつて、この高き心と、尽忠の至誠こそ以て我等が今日の難局打開への要素として学ぶべき数々であらう。

と評した。

『草のなか』については——

“新興小説”（作者の意図的に非ず読後の感なり）としては、こうしたものをこそと思はされた私だつた。／これは私達の環境の内にもある現代への思考を巧まずして、淨く真面目に表現して余す所がなく、併して、より高きものを求めんと常に努力しつゝ、戦局への推移にも処して行かんとする作者の純真性が良く表現されてみて、こゝにも美しい日本精神が見られる。〔中略〕この作者のものこそ、今日誰でもが進み得る、卑近にて安易なる奉公の道であつて、地道ではあるが斯くして所を高く取り上げ世に示して呉れたことを、私心から感謝したい。

とのこと。

なぜ宮本武蔵か——「武蔵の武士訓は、所謂る大名権門の口でなく、自己の自戒と社会人への示唆に富むものだと思つたのと、今日の特攻精神に一脈關聯せざるなきものかとの見地からであつた」とまずは記し、「処が、この両著〔「宮本武蔵・武蔵隨筆集」〕の中に私は計らずも今日への大いな教訓を見出し改めて感動させられたのであつた。それは“二天記”に記載されてあると書かれてみた、／我れ神仏を尊んで神仏を恃まずと云ふ／武蔵の武士訓の言葉なる一句である」という。

武者小路の著述は、「第三の隠者の運命と云つて白樺に二年間連載されたものの中の一節の抜粋である」とのこと。

真理を否定して我々は生きることは出来ません。独立した人間として耐えられない侮辱を受けた時、我らは死を撰ぶ時があります。ある野心家が暴力をもつて、我等の誇りある独立を粉碎し尽さうとする時、我らは死を恐れてばかりは居られません。彼の前に跪づくか、死を撰ぶかと云はれた時、我らは死を撰ぼう。／愛する兄弟姉妹を奴隸にあつかはと強いるものに屈服する位なら…尚一説には勝ち誇つた暴力に対し、抵抗出来る丈抵抗するか、恥を忍んで屈服するか？武力を以て押へる必要のない平和の愛好者であると、暴力を以て如何とも仕難い真理の美を示して、彼らを精神的に征服すると？以上／撫雜ながら引用して今日への思考とした。

と武者小路が活用されている。

**寄せ書き** つぎに、扉といえる紙1枚がついて、そこに、「監視哨隨筆／縷紅草／雲井寮備品」と記されている。そのつぎのページに、「青山莊主人」による「序」がある——

六月二十八日朝の散歩に監視哨を訪れ籬に縷紅草苗数本を植う。哨員日々灌んことを約す。帰り

てつらつら思ふに半日監視の暇々に潮路を眺めつゝ思ひ出すことども、短歌俳句、何にても遠慮なく書き留め後続員の慰めに資し又青松に適宜選抄して掲載せば如何に楽しくあらん。即ち空梅雨の縁に古ノートを割き一冊を綴り今井兄に托す。頁尽くれば喜んで第二冊を補給すべし、哨員筆を馳せられよ。

ここにはまた、貼られた紙片に、縷紅草の説明がある。

<sup>るこうそう</sup>縷紅草（虚子歳時記より）／蔓草。茎は数尺に及ぶ。葉は羽状に分裂し糸状。夏日、漏斗形で小さい紅い美しい花を拓く。稀に白いのもある。

ここまでは青山荘主人＝林の手。

この、「監視哨随筆／縷紅草／雲井寮備品」と記された扉のある稿群は、それが表表紙となる1冊の帳面がまるごと『青松』に綴じられているようだ。雲井寮とは、大島の北山中腹にある四阿で、そのあたりが機雷監視哨の場所だったらしい。雲井寮から山をすこしあがったところには、1940年に社殿が落成して鎮座祭がおこなわれた大島神社がある。雲井寮の近辺は、見晴らしがよく、平時には憩いの場であり、神聖な領域であった。

そこで監視哨にたつものたちのつれづれに、いくにんかで書きとめ、読み継ぐために雲井寮の「備品」としてつくられた冊子が、『青松』に綴じられたのだろう。医師林文雄の勧めでつくられている。

つぎの1枚には、末尾に「土谷勉」の署名がある。

監視哨の崖に荒波が悲鳴を上げてゐる。／“君ヶ代は巖とともに動かねば／砕けてかへれ沖つ白波”／愛国百人一首の伴林光平の歌を思ひ出しますね。／驕らば驕れ／荒ばゞ荒べ／巖と共に動かざる吾らの覚悟を知るや知らずや（六月二十九日）／（土谷勉）

土谷の記載にあるところからすると、この『縷紅草』は6月末に執筆が始まったか。このペン書きの脇に鉛筆書きで、「五月闇聴覚延す海原へ」と記されたそのうえに抹消線が引かれている。

そのつぎのページ――

敵機憎し／緑は茂り／月未だ出ず／己が身も／任務は重く／気は軽し／糧食乏しけれど／未開の地又多く／武器弾薬なけれども／我等此処に在り／醜翼来らば来たれ／此処又戦場なれば／敢へて援兵乞はず／決意は固し／監視隊。／（六月二十九日、）／（長野生）

縷紅草／どんな花が咲くのだろう？／生れて聞いた事もない／又見た事もない／そこに何んだか  
待遠しいものがある／鮮やかな、／優美な／香気な／思ひは走馬灯の如く、／私にはもう頭の底  
まで／この縷紅草が沁み込んで／恐らく一生離れまい。／先生の溢るゝ温情と共に／絶対不可分  
のこの縷紅草、／監視哨の垣根に／自から植えて下さつた、／すこやかに、伸びよ、／うんとう  
んと伸びよ、／私はこの一本の草花に／良きエネルギーを見出し／明日の汗闘を誓ふ／戦場の真  
只中に／美しく咲いて呉れ。／（六月二十九日）／（長野生）

長野は誌面初登場か。

そのつぎのページ冒頭には、鉛筆書きで署名は「枝風」、「機雷監視ノ夜」が題目か——「◎海原  
へ聴覚延びる五月闇／◎蚊帳中に監視心の夢淡し／◎警報や靴をまさぐる五月闇／◎五月雨るゝ方  
向板に組んで立つ」。さきの鉛筆書きは、この俳句の下書きか。

**前日** 枝風の句詠のとなりにペン書きで、美津夫「七月三日の朝」がある。松田美津夫によ  
る散文詩。

朝陽の直射にいさゝか平公致し先ずしヨーじを閉じる、今度は風が入らずなかなか暑い。昨日  
までの梅雨も今は晴れたものらしく本格的の夏は来ぬと言つてもさしつかえないらし／思えば人  
間と言ふ奴やつかいで又かわいゝ動物だと思える／朝陽の直射をさけるために第一の努力を試み、  
涼風いかにせば肌を楽しませるかを考えへる＝しかしてついには物に働きかける＝先生笑  
つて下さい＝まる扇を使いつゝある姿をです。／でも有難く生れて居る、是も人間だ／外部か  
らくる或るものに対し内部にあつてすばやく是に処す方法を考えへ、又外部へとはたらきかけて  
行く——しかして自己の住いと自己心の要求に当てはめる。

7月3日とは高松空襲の前日を指しているかとおもつたが、散文詩の本文は戦争を直截には語って  
いない。その日のまえに記されたのだろう。

**男** そのつぎの、「やめる我男子」と題された稿には、表題のしたに赤インクで、「(泉俊夫記  
らしい)」とみえる。この後筆とみえる赤インクによる傍線が本文の各所にある。

奉仕団員の一人僕が是れで三度目の監視である、二度目に詰めた時、相棒一色君と沖縄戦局を話  
合い、とにかくも沖縄の米軍を追ひ落しえたら戦勝の速やかにきたるべしと言ふ事に落着いた。

／処が三度目の今日では如何だ。／沖縄もすでに敵手に有り。あれだけに大戦果が上りながらに  
 残念！ついに日本本土決戦なさずばなるまじの今日となる。／しかしながらも敗れる事なしの信  
 念は米敵身近に迫る今日、サイパンを失ないし時のそれに比して、さらに固く大いなるを自己を  
 して体得さしめられたは我ながら理解に苦しい、僕も内部にかゝる大信あるからは、他人・何人  
 も比しく日本勝利の朝おとずれるを確心せられて居ることだらふと思ひ監視の役目嬉しく果し  
 つゝある次第。今度で三度、四度目には如何になることか、ひよつとすると土佐に敵を迎えて居  
 るのかも知れない、其の時の我等のなすべきは？思えば胸苦しきものがなきにしもあらず。戦ひ  
 勝つ・さなくば自決・／皇民我の本分唯に是のみ。有難し我男子。

「次第」の語を文末におく書き癖や、このペンの手の跡からすると執筆者は松田か。

**そのつぎ** 「やめる我男子」のつぎのページは、かなりの走り書きにみえる――

爆音は絶え間なかりき梅雨はれて昼ひそかなる高松の町を梅雨晴れの暑き日となり友とおれは警  
 報鳴らず昼移りたり／戦ひは日にきびし／縷紅草の咲くそのころの勝さを信じて疑はず雲を凝  
 視むる〔ここまで鉛筆書き〕

あをひ海白い渚、清きみどりの島山／噫々、美しき哉大和島根／憶へば吾らの祖先らはひたすら  
 に／天皇に仕へまつりて斯く清らかに／美しき大和島根を／敵として守護し給ひぬ／然るに今や  
 健国以来かつて無き／国難迫りぬ／皇国の興亡を決す可き戦ひは／目前に迫りぬ、興か亡か／否  
 神洲日本断じて破れず／励めりとは云へ赤子吾ら／出来得可きつとめに月日をいそしみ／清く明  
 るく正しく直き生活のもと／ちかつて皇国の必勝を祈らむ〔ここまでペン書き。改ページ〕

しづかなる島に住む身の明暮に思ひ沁みつゝ涙ぐむも／敵襲に待機してゐる哨友和田と吾れに／  
 唄ふよ目白ほゝじろ／静寂なる監視哨舎の昼更けを吹き／抜けて涼し海よりの風 としを生〔こ  
 こまでペン書き〕

このペン書きは泉俊夫か。

小青く水清き空また碧く晴れ渡る／大島にも洋鬼の息吹きかやうやく掛／敵機去り哨舎をめぐる  
 若葉雨／哨舎の灯ほの暗くして火取虫／機雷監視のみはらしの海をとどろきて／機影ハ迅しただ  
 に南す 繁／南瓜の伸びあまりたる芽を摘みぬ／碧空に機影認めず監視哨／戒報之方向板に敵機

無く／炎天に（オヤツ）持ち来る婦人団／ゆるやかな雲の流れに敵機無し／友太郎〔ここまで鉛筆書き〕

「繁」は綾井、「友太郎」はだれか。婦人団の「オヤツ」とは、和やかなようすがいくらかうかがえよう。

**瞼の裏** つぎの稿は、青インクのペンで文字が記されている。

久しぶりに見る鶏舎は、青々とした桐の葉に、おほはれその下で鶏がコツコツと飼をひろつてゐる、／すつかり緑のしげつた小道を上る、かわいた道には、太陽が白々光つてゐる、／午前の監視員と交更して哨舎には入る、／正午の報道後に林先生より高松の状況の放送がある、ジツトきき入つてゐるうち、知らず知らず熱いものが瞼をにじんでき、／ひさんな、リサイ者の状況がまぶたの裏に浮かんでき自分が戦地で見た、現住民達の焼出された、哀れな様子を思ひ出し——あつ、あのやうな目に内地の、いや高松の同隣が会つてゐるのかと思ふと、言ひ知れぬ憤激をおぼへる、／哨舎の椽<sup>エ</sup>に立つて、高松の方を眺めリサイされ死亡された方々の、めいふくを祈る、／醜敵を打ち破らねば、これらの人々に何と申しわけが出来よう、あらゆる苦しみも、たえ忍んで戦抜かう！！／遠くの島々は霞に包まれ、ところどころに点々と漁舟がちらばつてゐる、／汀に打ち寄せせる波の音も静かにきこえる、この美しい神州を何で米鬼共に、汚されてなるものか！  
／太陽は西にかたむき、交更の時も近ずいて来た、友よ、がんばつて皇国の必勝を祈ろう！

本文に傍線を引いたり字句を修正したりしている赤インクのペンで、このページ冒頭に、「(寒川氏かも)／聯合奉仕団長長野太郎氏？記らしい。／(高松空襲への想いなど具体性あり)」と記してある。これもまた後筆だろう。

7月4日午後の記載か。

**確信** 松田美津夫による散文は、「七月十一日」と題された。

此の前に立つた時は高松市がまだ仇敵の魔翼におかされてなかつた。今こうして眺める時なんらの変化をも見いだせないけれど四日の日の朝のできごとは夢でなくして現実なのだ、天をこがす彼の大火煙・思えばまさに夢でしかない、しかし夢ならぬ悲報の数々！／どうしたら胸が晴れやう、もやもやするこのもだえ・やりばのないいかりがこうして握るペンの先にいやと言ふほど

力がこもってくる。／一ヶの街が亡びる、是やつぱり人間の有様を示して居る、時ならぬ時が思わぬことをしでかし思わぬ境地に立たしめる、誰をうらむうらむことのできぬ或る者の大能・それが人間以上の思考をこらして居る様だ。／高松の悲報を前にうらむべきは米国・斯くはつきりとした対照物を見いだす。しかしながら其の背後にかくれてうかがへる或る大能者の思考＝まさになすべきすべのないほどこし様をも見いだせぬ神秘の手業に我等の教えられつゝあるものは何か、是れ此の一事をしかと憶る時、日本勝利の朝はくると確心する、以上。

「大能者の思考」とは、なにを指すか。

**城内** 署名は、「(太郎)」か。表題は、「分哨の思出」。「13/7」は、7月13日をあらわすか。全編鉛筆書き。

アカシヤの並木が強い光に照されて白く光つてゐる。城門を通行する人々は歩哨に憲兵に女巡査に夫々良民証を示して取調べを終へるとホット一息安心した色を浮べて分哨の前へ来て立止り最敬礼をして通行する、中には愛妻を馬車コーチョに乗せて自分が小さい支那馬の手綱を引いてやつて来る、かつちりと軍装に身をかためた歩哨の前へ来ると彼等は慌てゝイー、イーとあせつて馬も止め車から妻を下し二人で最敬礼してにつこり笑ふ。／コラ笑ふ奴があるかと大声で叱りつけもう一度やり直しさすと彼等はすなほに再度繰返す、そして大人謝々と云つてすました顔付である、／田舎住居の何にも知らない住民達の心は一体我々日本の兵隊に対しどんな気持を持つてゐるであろうか？／表面は微笑をたゝへてゐるか内心は抗日、排日が充満されてゐるであろうか／又激しい戦禍から抜出して宣撫工作が軌道に乗つて城内は秩序正しく明るい生活によみがへり彼等は感謝の気持で居るだろうか？何れにせよ山奥に住み何時戦場となり我が身危険の状態にある人々に比較すれば確かに彼等は幸福者に違ひない。／大きい西瓜、白茄子を担つて城内の市場へせつせつと運んでゐる、オイオイとワザト呼び止めて一つ売つて呉れ一箇幾らだと尋ねる（控衛兵は日中退くつだから）／一箇一円五十銭と来る、これにはいさゝか驚いた／四人五人からでやつとのこと一箇二十銭にして戦果が上つた。／支那人の商売なんてこんなものだ。／突然慌しく警備電話がかゝる、無論警備隊本部からである、イ部落方面ニ敵が侵入したとの情報である、ソレ配備と予定の計画に基いて城壁に手榴弾を四、五発持つて上る／鉄兜をがっちり付けて準備完了／

こうした仕末、僅か長以下八名位で先づ百人や二百人位の敵襲は大丈夫なのである。／何処からとなく城内から支那の子供が歌ふ「白地に赤く日の丸染めてあゝ美しい日本の旗よ、」又愛国行進曲のゆるやかなリズムが聞こえて来る。

ここにいう「城門」「城内」とはどこか、中国大陸のどこかか、これは創作か記録か、どう考えるにしても情報が少ない。

**忠節** 斉木生「愚感」は、帳面を縦にして横書きで記されている。

高松を目前にして／彼の目を想ひ起し、戦争の残酷性と／爆撃の凄絶さを…／この風景絶景の展眺にみて思ふ時／この争闘！彼の相克なくしては生きられぬ／人数が淋しくなつて来る。／無心に地を這ふ蟻や／歓喜の絶頂に唄ひ続ける頬白など／これら小族どもが限りなく羨しい…／さはれ戦争は不可避である。／残されし道は唯頑張りのみ。／監視哨勤ム……之れ吾等が卑近の忠節にあり。／以て勝機は皇軍の善戦勇謀に待つあるのみなり。 七月十三日記

つづいて縦書きで――

縷紅草いくさ最中に芽生へけり。／崇<sup>たか</sup>き家に縷紅草あり師の情<sup>こころ</sup>。／縷紅草手植<sup>うた</sup>ぬし人の詩想ふ。  
 斉木稿のつぎのページはまた筆記が縦書きにもどり、鉛筆書きで――

七月十四日／どこまでも神に祈りて勝百まで／雲井につとむ機雷監視哨／朝光<sup>あけぼの</sup>や雲井の下に南瓜も／花咲き薫る大戦かな／いつまでも大和島根か勝つまでは／ゆるがぬ心雲井監視哨／大戦大和心に日は落て／機雷なくさば夜もすがら 高岸明夫／空襲や大島構へは雲井療に／見いだす花か我れにかへりぬ／監視哨空襲なきやせみの声 友春夫／彩なして哨舎の庭に競ひ咲きし／日照草も萎えて乏しき／しほれたる日照草のそこかしこ／目に追ひつつ昼をいたりき／西尾

**高松** 鉛筆書きとペン書きがまざった稿のあとに、ページの途中から「高松」と題された鉛筆書きの稿がページをまたいで綴られる。

高松／高松はかそかにけぶつてゐる、高松は静寂そのものゝやうだ、／こゝから遠望する高松は、何らの不平も抱かず、何らの憤激もなく／その夜の惨禍など夢にも思へさうにない。……／三日の昼／あの歴史的な夜の前日、僕はこゝから高松を監視したのだった、絶え間なき爆音に、ほのかなる汽車の白煙に、／そして梅雨晴れの陽の反射に、／僕はあまりにも平和な高松を意識した

ものだ、だが、……／何たる激変だらう、亦戦ひの苛烈さだらう、灰燼、焼死体、無一物の群衆！！  
 ／その表示する今日の高松には火となった敵愾心が燃えてゐるのだ、あくまでも強烈なものゝみ  
 が存在し出したのだ、／あゝ高松！！／しかし高松はかそかに煙って望まれる夏空に疲れし眸を  
 移しきて／藻の流れゆく速さをおもふ／〔このあとペン書き〕くまもなく夏となる日の哨舎なり  
 ／ほのかなる郷愁に汗あえてみづ

**遠望** ページがかわり、「繁」とあるので浅野繁の稿か——

兵燹<sup>へいせん</sup>の嘆き言はねど炎<sup>ほ</sup>むらなす怒りをいかに耐へざらめやは 繁。／焦土とぞ化したる都心の街  
 路樹の黒き葉群に夕べ頭つ風。

ついで横書きで——

濤一つ隔ててどす黒く焼けのこつた街を望み乍ら今はわが家を焼かれわが子を失ひわが夫を妻を  
 失つた人々は如何に暮してゐるであらうかを思ひ、犇々と戦争の不可避のきびしさを知る。かゝ  
 る現実を誰が予想したであらうか／昨日まで満足な肉体をもつてゐた人達が一夜経た今日ハわが  
 腕を失ひわが明を失ふその悲痛な気持に想ひ及ぶ時安易な生活に慣れてゐるわれわれが嘆かれる。  
 ／われわれすら疵がいよいよ悪化しどうしても切断しなければならぬと決つてすら決心は容易  
 につきにくいものだ。／あゝ戦争の実体は其処にこそ在るのだ。

**足** おなじページで執筆者がかわる。「七月十九日 美津夫」とある稿は、松田美津夫の執筆。

足ごしらへ！朝食もそこそこかけのぼつてきた雲井寮。先ず足のほうたいを巻きなほしにかゝ  
 る、ふと或る感じが微笑ましく心をなぶるやうに通り返した。此奴見逃すにはもつたいないペン  
 の先きにのこしてやれと又いたずら気が起こつた次第・とにかく足ごしらへはできるだけしつかり  
 して置く必要がある良く言い又良く使用せられて居る言葉だが人の足元見る奴・足元を見られ  
 たなど……まあまあなんと言つても足元だけはしつかりする必要がある新約書にキリストが弟子  
 に足の裏を洗ふことをこと更らに教えられてあつた様に思ふがなにか一つやるために先ず腹ごし  
 らへ次が足となつて居る様だ。日常生活に足ごしらへは此の上になく大切なことだと感じた次第。  
 ／なにしろ黒い足にできたやけどの汁を防ぐためほうたいを巻きなほしにかゝり是だけの教訓を  
 得たのだからたいした損はしてないつもりだ／此のつもりをもう少しつもらせて行くと大したも

のができあがる筈なのだけれどつもりつもりはやつぱりつもりでどこか知らぬ処へ埋立をして居るらしいちりもつもれば山となる筈の処がそこなしの海. 以上. 足ごしらへの面白さ!

**仕事** またペンの手がかわる。署名は、末尾に「太郎」とある。

昨年の夏である。／ある人は云つた。／「戦争はどんなになつて居るか知らん／自分は只自分の仕事をして居れば良い」／私は傍で何気なく右から左へ聞き流した。／それはあまりにも平凡な言葉だつたからである。／其の平凡な言葉が幾月後に頭にピンと来て今に沁み込んで居る。／誰れしも知らないとは中々言へないものだ。／まして大勢の前では尚更である。／満洲派遣軍最高司令官である大山元帥の言葉が此処で思出される。／「閣下出席中何か一番苦しかったですか」と或る人の間に答へて曰く知つて居り乍ら知らない風にするのが一番苦しかったとの回答なのである／ある人は勿論新聞も読み充分の教養もあり戦争の現局位は良く知つてゐる人である／自分は只自分の仕事をして居れば良い成程其の人は大島になくなくてはならない人である。／全く言動一致してゐる。／私はある人を絶対に尊敬してゐる／そして其の平凡な言葉を名言だと信じて日常生活の座右の銘にしたいものと思つてゐる。／太郎

おなじページで手がかわって、「七月十九日」「短詩 蚤」とある——「小さい奴だが ばかにはできぬ／大いの男は まるまるはだか」

**義** ページがかわって、「美津夫」と署名がある稿。ペン書き。

今朝はめずらしく警報もかゝらず七月の太陽が明るすぎて小すゞめの声は大自然の美を讃じつゞけて居る、又私はとくると監視哨員への六百人の誠心のこもつたおくりものきざみ煙草をきせるにつめてぷつかりぷつかりとふかして居る悠長さ！さりながら一朝有事の時は立つべき備えを忘れてないから御安心 —／これはまあさておいて現今の日本常勢はあまりにも詰まりすぎてきた、いやまだ是以上につまつてくるだろふ、しかし、果せるかな、日本勝利のほど、いな勝利は確心する、さりながら一日も速やかに其の喜び安心を迎えたいものだとは希ふものゝ時の歩みは神秘である／人間の行ひは善につけ悪につけ大したことはできやう筈がない、米国が今、日本にあたえつつあるものは全力をあげてきて居るのに、安心して眠れない位いがせきの山、けれども時が保つ処の能力は余りにも大きすぎる。一朝、彼のいかりにふれた時、地上は如何に思えば

我等は只全身魂をかたむけてなすべきをなすこれのみ／結果は時の示配を受けるだけのこと／このことを知りながらなやみ苦しみにたえる時の永さにたえきれぬものかんじるのだ。

ページがかわって――

勝利、是がはつきり見えて居ればなにほどのこともないだらふが、もしも、うつかりすると不安がある！此の不安は平時でも比し比しあるにはるものゝ、戦時はまさに大いでありはげしくあるるのである。／時に我に勝利を得しめよ、我は汝の前に只だ祈るのみ、此の一事よりなすを知らず又なして汝に〔ここで筆記がペンから鉛筆にかわる〕なにほどの利をなすや。／只だ大能者の使者たる汝が業の前に人力のほどはものゝ数でなはない筈／時に汝は常に義に勝利を得しむ／時として不義の正義に勝るかに思わしむるに至るあれど最後に勝利を与ふる者は義なり。／時に我思ふ、吾国義のために戦ひつゝあると、さりながら汝の眼は人間我の見ると異なる、只だ我祈る／吾国の戦ひ義しかれと？／時に汝をして吾国の戦ひを更らに義しからしめよ。以上

インクがかすれたペンでなお書き続ける勢いは、なにか。

ページがかわる。まず鉛筆書きの短歌。

監視哨舎に真向ふ五険の頂きは／余光に映えてせみの声おつ／私心ならじ＝す念は興亡の／極まる秋にただ撃つとこそ／（西尾生）

**睨む** ついでペン書きで、「監視哨勤務」――

今迄よく写真週報や、その他の本で見て来た所々の監視哨の写真、それには女子挺身隊を持つて、指揮された監視哨も少くないらしい。／私達は、こういふ物を見る度如に、直接、戦闘にたづさはる事が出来なければ「蔭の力」、乃ち見張でもと心密かに希ひ亦、香かある＝をいただいていた。／その希がついにみたさるる時が来た。たがその反面それを感じる時、此の大御軍なまやさしいものでなく、いま更の如く、生か死か、興か亡か、祖国は重大関頭に立つを意識する。／なにはともあれ、「生かされて生く」ではなくなり、日々が無為の生活でなくなつた事は、大いなる喜びであり、我等の誇りである。／警報ひとたび発令さるるや、凝然監視の海をにらみて立哨し、「敵機何するものぞ」の鬨魂沸々とたぎる。／これがかつての日、人生を呪ひ、自己を持てあまし、安易な空想にその日、その日を送つた病者だらうか……／これこそ、我等一人一人が「み民われ」

の自覚に目醒め皇恩の万分の一に報ゆる秋は今と立ちあがった姿だと思ふ。／「蔭の力」はすでに戦闘隊となんら変らない重大性を持つやうになつた、連日の敵機来襲は苛烈の一途を辿りつつあるからだ。この任務如何に重く、我等の誇り如何に高し、ただ一路邁進せん、空をにらみ、海をにらんで、／（西尾生）

そのページの末尾に「田根正夫」の署名があつて――

任終えて異状なしと記す帳に風さわやかなり、その白き風（監視勤務）／〔抹消線があり判読不可〕

ページがかわっても鉛筆書きの稿がつづく――

監視哨に来る度気分がすつきり大変気持の良い一時<sup>トキ</sup>です／何故でせう。？やはり此処に来ると、直接に皇国に奉公の万分ノ一なりと報ゆる最上の場所であるだけ／身も心も引きしめる事に原因してゐるのではないかと、私は思ひます／終り

ついで、「立哨詠 大高」の表題と署名があつて――

七月二十八日機動部隊艦載機再び来襲ノ午前中即詠／爆撃音真近くありて立哨の心耳とがりぬ汝騒騒ぐ中に／投弾のとどろき及ぶ岬端に独り<sup>たちみ</sup>立哨す青き海原／爆音の来ると見る間に降下して銃爆音をたつる須臾の間／（男木襲撃）

そのつぎのページにも稿がつづき――

二十八日午前／・英戦闘機スピットファイヤー／・本土上空ニ初見参ノ報アリ。

ここで『縷紅草』は終る。

**批評** 「初期号評（文雄先生）」と赤インクで記された紙を台紙として、そこに貼りつけられた紙片に、「読后独語／青山荘主人」がみえる。さきの赤インクの文字は、後筆か。

表題のうえに記された「21 | XII | 受」「24 | XII | 返」は、受戻の日付か。ただこの号は「昭和二十年八月上旬発行」と表表紙に明示されていたので、するとこの林文雄の稿は以前に記されたのか。

○恋闕の至情、襟を正して拝読、大島小なりと雖もこの一国土ありて真に心強し／◎斉木操兄、長歌に短歌に創作に奮闘これつとむ、殊に軍人精神ハ筆末だ／熟せずと雖も弟を思ふ至情の発せるもの胸を打つ／每号一篇をものす位の意気で進まれたし／○笠居兄の淡々たる歌「玻璃窓に白

き月の光あり」など兄にして少しもわざとらしからず「生命の死ときめて」ハ推敲すべきか「黒き点となる蠅」も然り、二首目の様なのがよい／◎志真兄の歌淡々すぎて流るゝ如し、平明と平凡とハ差あり、そこに深き感激、秘められたる感激の潜在を要す／烈しき言葉必しも燃ゆる心を反映せず、冷静なる一語、時によく烈々たる至情を表す／「母の乳房を夢む若きを」少しく誇張と云ハれんも着想面白し／○泉兄も前途有望と思ふ／第一首「爆音と機銃連射のとゞろきハ交錯しつゝ島をどよもす」など気持が良い／「櫓に沁む陽光」も観察が細い／星霜を破れるまで熟読せよ／○綾井兄「うぐひす谷」が面白い／常に若き心を以て進撃々々。赤沢兄固くなるな、もっと楽に凝らずにゆけ。／○浅野兄不相変研究的態度、その闘志をうれしく思ふ／「成層圏を息ひそめ思ふ」「天兵の眼の光」「義勇刀」「濃緑の戎衣」等潑刺たる新鮮さを感じ／○島庵独語、本年最後の快文字、塚田先生ならねど社会の人々よ島の阿呆大将を羨め羨め／○正秋の句大家の風あり／繁の「文字丁寧に」ハ適切、余自ら恥ず、さるにても繁兄の字の美しき事よ、手の不自由な人ハ兎も角書きなぐりの誤植ハ新年を以て改めませう／○一同恋闕の至情を以て新年を迎へハ不足あるべからず

さらに紙片外の台紙にも、「表紙絵がたまらなくうれし／繁兄の真摯な態度が見える(林)」の追記あり。

土谷勉の稿「恋闕の至情」は、本誌第2号(1944年)掲載。斉木操「軍人精神」もおなじ。笠居、志真、泉、浅野の短歌も、長田の「島庵独語」もまたおなじ。するとこの林の「読后独語」は、後筆とおもわれる「初期号評」との注記があったが、もっとはっきりと第2号への評とわかる。

本誌創刊号は、1944年11月30日発行、第2号には発行年月日が明示されていなかった。その創刊号に載った林の「読后独語」には、「二十一日受領／二十二日返／二号も一緒に来た」と記してあった。第8号に貼りつけられた第2号の評が12月付とすると、創刊号発行の翌12月下旬に、第1、2号そろって林のもとに届けられ、ついで「読后独語」を執筆したとなるか。

林の稿の裏面には、おそらく活版印刷の書籍の9ページめが貼ってある。書名か章題が『心の光三題』という書籍の一部とおもわれる。

つぎの1ページが、縦罫紙欄外に「No.6」と記されたペン書き原稿で、なぜそのページだけが添

付されたのか不明。そのページの裏面には、やはり活版印刷の4ページめが貼ってある。柱の記載はない。

**あとがき** 本号の「あとがき」は、「日本標準規格 A4」の文字と罫目が印刷された四百字詰め原稿用紙1枚と反故となった原稿用紙裏面に記されている。

◎七月四日未明、米鬼の醜翼下に晒されてゐる高松をまざまざと見た人々の脳裏にあの焼夷弾の炸裂音、焰群の雨、天を焦す火柱はふかくふかく刻まれたことであらう。あの光景は生涯忘却することの出来ない悲憤を醸した。われわれはこの悲憤を如何に体顕すべきかをふかく思考しなければならぬ。／◎青松第十一号を高松戦災特輯として編輯した意図も此処にある。／◎この戦災のまきびしき実相をあらゆる角度から各々の個性を通して表現された作品を網羅したかつたのであるが、あまりにも深刻な現実に向つて冷静を保つことは当底出来なかつたのであらうか、それとも第三者であるが故にか、気魄に於てやゝ欠くところのあるのは、やむを得ないが出来得る限りの努力はそれぞれに顕現されてゐると思ふ。とまれ戦争の苛烈なる現実のさ中に生きてぢかに見る自然の風物こそは新鮮な印象を与へられる。／◎林文雄先生には、かつて米鬼が投下した補助タンクの説明と蛆療法との玉稿をよせて戴くことが出来た、共に興味ある内容である。先生に厚くお礼申上げる次第である。／◎土谷兄の「武士の嗜み」は読みごたえのある文章であり、相互間に於て潤ひの枯渇しつつある現在必読をおすゝめする。／◎研究では小見山和夫兄の「雷の丘」、喜田正秋兄の「自句自解」ともにわれわれ文学するものにはよき道標であると信ずる。／◎感想に於ては、小見山和夫、笠居誠一、松田美津夫、斉木操諸兄の四篇、それぞれに個性のある作品である、味読を乞う。／◎詩壇は松田美津夫兄が孤軍奮闘して居られ、短歌壇六名、俳壇五名、共に寥々たる夏枯であるが各自の特長が十分に発揮された作品群であるのはたのもしき限りである。／◎最後に林先生の発案になる“監視哨随筆 縷紅草をそのまゝ綴つた。雑居生活の面白さに特長がある。この中には新人も顔を見せて居られる。これ等の人たちが双手をあげて青松に馳せ参じて下さることを期待する次第である。／◎今回は土谷兄との合作でこの編輯を成した。

土谷とともに本号を編集したという当人の署名がない。「目次」によれば、「あとがき」は浅野繁の

執筆だった。

**青山荘** 「あとがき」原稿2段組み2枚の最終ページ下段は、林文雄の稿「青山荘から」。

◎内容はこの二、三回よりも劣って居るかもしれぬが高松戦災の良い記念になる。何と云ふても  
 /中井八千代/中島徳吉/両君リキ作は圧巻である。中島君の写実もあの晩そのまゝであり、更  
 に中井君の印象的筆致及色彩は彼女の優れた天分を表してゐる。これは永く大切に保存さるべき  
 ものである/◎縷紅草面白く拝見、皆がこれ程打込んで筆を採ってくれたのが嬉しい。益々励ま  
 れたし。(林文雄)/◎補助タンクの敵性文句、警察へ届ける関係上訳しておいたが誤訳もあらふ。  
 /斉木兄も英和辞典を引いて意見をのべて下され嬉しく思った。敵性にあれ独性にあれ語学の勉  
 強は甚だ愉快なものである。/美津夫兄よ、不景気な音をあげずに勉強しやう。余、全生で盲人  
 らとエスペラントを勉強し反って励まされし経験あり。

林のいう中井と中島の「リキ作」とは、「目次」にもあった「挿画 中井・中島」をいうのだろう。  
 これまでの号にもこのふたりの水彩画が載っていた。ふたりは「あの晩」のようすを描いたのか。  
 残念なことに、本号にそれらは綴じられていない。

さきに見た、林が「TANK 二つ」に詳細に英語表記を転載していたのは、警察にとどけるためだ  
 ったか。

**その裏面** 「あとがき」の2枚めが、「10×20」の文字と罫目が印刷された四百字詰め原稿用紙  
 裏面の再利用だった。反故とされた原稿用紙の罫目は、短歌で埋まっている。署名はない。

<sup>くちびる</sup>唇に麻痺及びたり柴笛を吹けばつばきのしたたかに出づ/丹の頬の童が独り笛を吹く夕べの  
 浜の合歓の花蔭/障子はずして俄明るし海の風瓶のぼら揺り吹きぬけにけり/蓮に照りかへる<sup>ひ</sup>光  
 がゆれ明るきりぎし赤し合歓の花群/南天の花ほろほると散るみつゝ思ひ極る日ほてりの路/夕  
 日射しいままともなり<sup>きりぎし</sup>断崖に丈ひくう咲く合歓の花群